

「小中高の学びの接続—いま、どのような言語活動が授業に必要なか—」

司会者： 早瀬 光秋 (三重大学)  
豊住 誠 (皇學館大学)

パネリスト： 白畑 知彦 (静岡大学)  
前田 昌寛 (石川県立金沢商業高等学校)  
川村 一代 (皇學館大学)

小学校英語教育の教科化や早期導入が議論される中、これまで以上に学校種間のスムーズな移行や連携が必要となっています。小中高の学びは、「ドリル、エクササイズなどの形式重視のものから意味重視のコミュニケーション活動へ」といった言語活動の種類や、「気づきを促進させるための明示的な指導から学習者による暗示的な気づきへ」といった言語形式の指導方法などの観点から連続体ととらえることができます。

本シンポジウムでは、それぞれの学校段階でふさわしいと考えられる言語活動を各提案者から提案していただきます。その中で、言語形式に対する気づきや、より自然な文脈での言語使用を促すための指導方法や工夫も紹介していただく予定です。

川村先生からは、小学校での英語教育(外国語活動)における気づきを促すための指導と中学校への橋渡しについて、白畑先生からは教員養成、第2言語習得研究の立場から、中学校での指導と小・中学校間、中学・高校間の接続について、前田先生からは高等学校における指導についてディクトグロスの実践を中心に提案いただきます。

#### ① 繰り返しの中で学習者が自ら気づき学ぶ言語活動

—小学校での短時間学習の実践から—

川村 一代 (皇學館大学)

小学校外国語活動では「コミュニケーション能力の素地を養う」ことが目標に掲げられており、その目標を達成すべく、授業では外国語(英語)を使って「意味のあるやり取り」をすることが求められています。しかし、現行の45分授業を週1回という厳しい時間的制約の中では、「意味のあるやり取り」をスムーズに行うだけの語彙や表現を身に付けるのが難しいという現状があります。

平成32年度から小学校高学年において英語が教科化されるにあたり、45分授業週1コマに加え、知識・技能の定着を図るため10~15分を単位として繰り返し指導を行う「短時間学習」の導入が文科省から提案されています。短時間学習を活用して語彙や表現を身に付ければ、45分授業で行う「意味のあるやり取り」で、児童が自分の思いを英語で伝えられる幅が広がると考えます。

外国語学習においては、小中高どの段階においても、繰り返し練習することが必要です。しかし、その繰り返しが意味のない機械的な作業になってしまうと、学習効果が無いどころか、児童や生徒を英語嫌いにしかねません。繰り返しの練習は、児童・生徒の興味・関心を維持し、児童・生徒が主体的に関わり、学びを実感できるものであるべきと考えます。

本シンポジウムでは、三重県の小学校で行われている、音声を通して英語と日本語の違いや言葉の規

則性に児童自らが気づく短時間学習の実践を紹介し、中学校への接続についても提案したいと思います。

## ② どの校種にも共通した(外国語の)学びの方法を考える

－特に中学校での英語教育に視点を当てて－

白畑 知彦 (静岡大学)

本シンポジウムの主タイトル、および、疑問文的副タイトルの意味を絡めながら検討し、暫し熟慮の結果、本発表者は「どの校種においても、自然な文脈の中で言語を使用し、練習する言語活動の徹底」という(ある意味、当たり前のこと)を、今一度提言しようとするに至っています。「学びの接続」、つまり、どの校種にも共通した教え方、ということは、認知レベル(学習者の年齢)や習熟度(学習者の校種)が異なっても、本質的な部分において、その教え方は変わらないということの意味すると思います。それは本シンポジウムのテーマである「学びの接続」を議論する際に大いに関連するのではないのでしょうか。また、学習者の「気づき」についても時間の許す限り言及したいと思います。

本発表者がお話ししようとする内容は、本シンポジウムにご参加くださる先生方の大半が、すでに実践されている方法だと思います。つまり、教師が当該文法事項を、有意味文脈の中でまず使用してあげること、そして、そのような文脈の中で言語活動を行えるように様々な小道具を用意し工夫をすること、です。しかし、残念ながら、そのような先生方は、日本の英語教員の割合から見ると、多数派とは言えないかもしれません。シンポジウムにご参加くださる先生方というよりも、むしろ、その後ろにいらっしゃる先生方へ届くことを期待しつつのメッセージです(ただし、筆者の考えが100%正しいかどうかは保証の限りではありません。あくまで、ご参考になれば、と思っています)。

## ③ 自然に近い言語活動をとおして、生徒の気づきを大切にする言語形式の指導

－高校での実践から－

前田 昌寛 (石川県立金沢商業高等学校)

タイトルから分かるように、(1)小中高の連携、(2)いま必要とされる言語活動、の2点がシンポジウムにおける議論の焦点となります。高校での英語教育の問題点として、扱う言語材料の量が多くかつ複雑であるために、明示的な説明が多くなってしまふことがあげられます。つまり言語を「使用する」という観点よりも「理解すること」に重点を置かざるを得ず、教師の一方的な講義形式の教授や機械的な練習・訓練に多くの時間を割くことも少なくありません(注:「練習・訓練」を否定しているわけではありません)。しかし定期試験ごとに「なぜ教えたのにできていないんだ」という教師のボヤキに表れるとおり、説明したからといって言語の理解や定着が十分になされるわけでもなく、ましてや使えるようになっていない現実があります。

本発表者は、いま必要な言語活動のキーワードとして「自然に近い言語活動」をあげます。「脱・機械的な練習や訓練に終始すること」が最も提案したいことです。そして小中高の連携を束ねるキーワードとして「学習者の気づき」をあげます。「気づき」こそ学習意欲を促進するエネルギーであり、「気づき」のポイントを戦略的に活動へ盛り込むことが重要だと考えます。以上2つの観点を柱として、高校現場からディクトグロスの実践とその成果を報告します。